
ピンクちゃん

きみよし藪太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ピンクちゃん

【Nコード】

N6750N

【作者名】

きみよし藪太

【あらすじ】

ピンクちゃんは欠陥ものの使い捨てライター。

火がつかないという致命的な欠点で捨てられそうになるけれど、でも何度も奇跡に助けられてる。

ピンクちゃん、君に祈りをこめた女の子が今夜も男の人を待っているよ。

ピンクちゃん、そんなの全然君には関係ないんだけどね。

その赤いライターには、白く小さな字でお店の名前と電話番号が入っている。赤に白を混ぜた色だからと言って、そのライターの事を真理ちゃんは「ピンクちゃん」と呼ぶ。ピンクちゃんは真理ちゃんのスーツ、左ポッケで最近を過ごしている。お店のママに捨てられそうになったピンクちゃんを、拾ってくれたのが彼女だからだ。

ピンクちゃんは普通のライターなのだけれど、少なくとも外見上はごくごく一般的なライターなのだけれど、ちよつとした弱点がある。そして、そのウィークポイントはピンクちゃんの最大のピンチを何度か運んできている。

ピンクちゃん、ライターなのに火が点かないのだ。

それは生産された時点からの欠点で、どこが悪かったのか何が原因だったのか、ピンクちゃん本人にもちつとも分からなくて、オイルは充分に入っているし、ピンクちゃん自身も小さなボディにはちきれそうなくらいに頑張りで充滿しているのだけれど、やる気はまるで空回り。どんなに頑張っても、ほんの小さな火花を見せたり見せられなかったりする程度。

その役立たずなライターは、もちろん使い物にならないので、最初に渡されたお客さんから返されて来ていた。

「ママ、これ使えないよ」

ピンクちゃんが身体に刺青している名前と電話番号は、ちよつとした繁華街の中、古いビルにあるスナックのもので、ピンクちゃんにとってその事はとても有利に働いた。普通ならばいと捨てられてしまつて、はいそれまでよの人生だったはずが、お客さんがママの「あら、ゴメンナサイねえ」と鼻にかかった甘い声が聞きたいが為に、お店に連れて帰つて来てくれたのだ。

ママはもちろん役立たずなピンクちゃんをうりやつと捨てようとしたのだけれど、幸いな事にまたしても救いの神が現れた。それが

ピンクちゃんの現在の存在場所をくれている、真理ちゃんだった。

「あ、ママ、捨てちゃうならそのライターくださいな」

あらやだわ、変なものの欲しがる娘ねえ、ところどころ笑いながらもママは可燃物のゴミとしてライターを捨ててもいいものかと迷っていたので、別にゴミなんかくれてやっても、と思ってピンクちゃんを真理ちゃんにあげた。

真理ちゃんがピンクちゃんを救ったのには、ちょっとした事情があった。

彼女はスナックの中でも一位二位を争う、美人ではない娘なのだ。もちろん、そういうお店に勤めているのだから、不細工って訳じゃない。でも、真理ちゃんはどちらかといえば可愛い、田舎っぽい顔で、ファンデーションを取れば鼻の上にそばかすが散っているのが悩みだった。そして、彼女はあるお客さんからプロポーズされているのだ。

そのお客さんは飯田さん。髪の毛だけはふさふさいっぱいあるのだけれど、背は低いし、ぽってりした体系をしている。年だって、そんなに若くない。彼の年齢なら、結婚して子供がふたりほど居てもおかしくないくらい。

彼は実家で作ったのだと、ジャガイモやトマトを店にお土産として持ってくるので、従業員や常連さんからは少し笑いにされているような人だった。

悪い人ではない。

いい旦那さんになりそうな、いいお父さんになりそうな、老後も夫婦で美味しいお茶が飲めるであろう、ふくふくとした人だ。今まで貢ぐだけ貢がせるような男ばかりを恋人にしてきた真理ちゃんには、彼のプロポーズは嬉しかったし、お嫁さんになれる自分というのにくらぐらしたりもした。

けれども、けれども、と真理ちゃんは思う。

私だって一応夜の女、燃えるような恋の方がお似合いなのじゃないかしら。

プロポーズの返事はいつでもいいよ、と言われている。

でも、やっぱりいつまでも待たせておけるものではない。

真理ちゃんはピンクちゃんを飯田さんに渡して、返事をするつもりだった。

『ごめんなさい、あなたじゃこのライターと同様に、私の心に火を点けられないわ……』

そう言つて。でも、本当は真理ちゃんも悩んでいるのだ。おばあちゃんの家は農家だったし、農業だってお手伝い程度だけれど多少は出来たりする。飯田さんはいい人で、今までの恋人達に比べたら、真理ちゃんはとても幸せにして貰えるだろう。そういう人は、優しいオーラが出ているからちゃんと分かる。

ただ、夜の女としての、プライドが。

人はそんなもの、邪魔だというだろう。馬鹿なつまらないプライドで、幸せを逃すなんて救いようがないと。

店のドアが開く度、真理ちゃんはスーツのポケットの上からピンクちゃんをそと押さえる。硬い感触。お店に入ってきた人が飯田さんではないと知ると、途端に真理ちゃんはほっとする。

ほっとする真理ちゃんなのだけれど、どこか寂しい気もしてしまうのだ。

今夜も来ないのかしら。

どうしてだろう、断ろうと思つていのに、飯田さんを待つているときどきした気分のようなものを味わつてしまうのは。

ピンクちゃんはもちろんそんな事知らない。ただ、そこにあるだけ。ピンクちゃんに、ひとりの人、いや、ふたりの人の人生がかかっているなんて知るよしもない。

ただ、ピンクちゃんは真理ちゃんのポケットにすっぽりと収まっている。

真理ちゃんは神様に祈つてしまう自分に気付いていない。もしかして、このライターが一度でいいから火を点けたりしたら、なんて一度でいいから奇跡が起きてくれたら、なんて。

ピンクちゃんは何も知らないので、祈ったりも何もしないし、こんなに自分が大切な任務を負わされているなんて気付いてもいない。捨てられないといいね、ピンクちゃん。

ピンクちゃんは、奇跡を身に纏えるのかしらね。

赤いライターは、そして今日も祈る女の子のポケットの中で、直接自分には関係のない男を待っていたりするのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6750n/>

ピンクちゃん

2010年10月8日14時21分発行